

清志郎

伊藤麻美

固さうな子馬の尻や晴れどほし  
葉脈のひんやりとして桜餅  
マヨネーズ工場春の川沿ひに  
春惜しむドーラン匂ふちんどん屋  
検査着に畳まれ癖や麦の秋  
十二時の時報に蟻のさまよへり  
ほつれたる日傘の刺繡防波堤  
香水の匂ふ庇に入りけり  
緑蔭に幽閉されてゐることく  
薔薇の雨忌野清志郎の墓  
ボイジャーの遥けさを言ふ端居かな  
夏帯を締めて子宮はこのあたり  
眠たさをとほりすぎたるゼリーかな  
脇役に渡す白百合束ねけり  
天牛の死に際の風なまぬるき  
濡れてゐる酸漿ばかり婆の庭  
引つ越しの荷に鶺鴒のつきまとふ  
木屋や定礎と深く彫られるて  
英雄の名を付けられて案山子なり  
禿げ山のさらに禿げたる葉喰  
すこやかに老いて沢庵石を持つ  
むささびが飛ぶぞ飛ぶぞと神の杉  
何もなき肩が強張る冬の滝  
剥製をすつと立たせて山眠る  
雪搔いて家庭教師をとほしけり  
武蔵野をひとり歩きの懐炉かな  
白息を多摩蘭坂に残しけり  
かんばせは洗ひざらしや寒卵  
みづうみの栈橋短か春の雪  
立ち上がりさうな茶釜や梅の頃